

体 育 3年A組	と び ば こ あ そ び	佐々木和哉
-------------	---------------	-------

1. 単元設定の理由

(1) 本単元の主張点

「とびばこあそび」は、基本の運動領域の「器械・器具を使つての運動」である。この運動の特徴は、挑戦対象が人ではなく、物理的障害か観念的基準であり、それらを克服したり達成したりしていくことが楽しい種目である。このことから、学習指導要領における3年生では、「マット、鉄棒、跳び箱などの器械・器具を使って回転、懸垂、バランス、跳び越しなど自己の体をいろいろな動かして、各種の動きに取り組む楽しさを味わうことができるようにする。」となっており、跳び箱の場合は、「跳び箱を使ってまたぎ越しや前ころがりをする。」と記述されている。同じ基本の運動領域ではあるが、2年生と3年生の相違点は、2年生では支持という言葉が記述されているところである。低学年の時期には、いろいろな跳び越し方に分かれる前に、跳び越し方をあまり意識させず、体を腕で支えるという経験をたくさんさせることによって、腕支持をしっかりとさせるというねらいがあると考えられる。この腕支持の経験によって、またぎ越しや前ころがりよりできるようになることが3年生での内容とおさえることができ、4年生からの器械運動におけるいろいろな跳び越し方につながると考えられる。

本校も年間カリキュラムを作成しているが、これは学級(=担任)カリキュラムという意味合いが濃いため、子どもの学習経験に大きな差がみられるときがある。本学級の子どもたちの約1/3の子どもたちは昨年度に「とびばこあそび」の単元学習をしており、基礎的なことは定着しているが、入学後全く学習していないという子どももあり、経験に大きな差がある。このような実態から、4年生から始まる器械運動を考慮して、体を腕で支えるという活動を通して、跳び箱運動の基本である「着手による体重移動」につなげることによって、跳び箱の楽しさを味わってほしいと考えた。

跳び箱の楽しさとは、跳び越すことによって気持ちよさを味わうことである。また、これによって「できた」という感動を味わうことにもなり、意欲が高まり、活動場所も広がっていく。活動場所には同じめあてをもった仲間がいる。個人活動が中心なことから、難しいかもしれないが、自分だけでなく仲間たちとも感動を味わえるようになってほしいと願った。これがよりよいかかわりとも考えられるからであった。

学習経験の違いから、活動内容においても個人差が大きいと考えられる。しかし、仲間と学習をすすめていくことにより、お互いが励まし合ったり、触発されたりしながらの楽しさ体験ができ、学びの質は高まっていくことを願っている。この高まりが「お互いのまなざしが響き合う」ということになるのではないかと考えた。

本単元での主張点を要約すると以下のようなになる。

- 高さという物理的障害をクリアすることによって、できたという感動を味わう。
- 学習カードや体育作文、学習資料を利用しながら、友達とのよりよいかかわりを大切にし、お互いに感動を味わう。
- 体を腕で支える活動を多くし、腕支持の経験をさせることによって、着手による体重移動をスムーズにできるようにさせる。

(2) 教科提案とのかかわり

学校提案をうけて、本年度の体育科のテーマは「運動の楽しさを真剣に学ぶには」で、サブ

テーマは「学びあえる学習集団を考える」となっている。

体育は運動を学習する教科である。しかし、運動の技能だけをみるのではなく、その子どものありのままの姿を見ることが大切である。これは教師だけではなく、子どもにもいえることだと考えられる。つまり、仲間のありのままの姿を見ることによって相手を認めることにつながり、また、自分のことも認識していくことになるのである。それによってよりよい人間関係を築いていけ、自分の居場所に安心し、自分を出せることになるのである。そして、お互いが励まし合ったり、触発されたりすることによって、個人の学びの質が高まっていき、そこから波紋が広がるように集団の学びの質も高まっていくことが予想される。これが、学びあえる集団ということになるのであろう。

本単元の「とびばこあそび」では、主に個人活動が中心となることから、集団というには疑問があるかもしれない。しかし、活動の場には必ず仲間が存在することから集団の学びでもある。「とびばこあそび」での学びあえる集団の変化は少ないかもしれないが、それをみとっていきたいと考えた。

子どもの活動の場は、時々に変化していくが、それぞれの場で自分を出せる雰囲気づくりを指導者が大切にしていかなければならないのである。適切な場を設定することによって、個人や集団の学びの意識の高まりを知ることになるのである。

学びの質を高めていくには、技能の高まりも当然重要となってくる。技能の高まりを保障する手立てとしてはいくつかのことが考えられる。ひとつは到達目標の設定であり、到達目標も単元と個人のふたつが考えられる。ただ、単元の到達目標について考えるとき、技能に視点を当てすぎると個人差の関係から無理が生じる場合がある。だから、どちらかといえば、学習の進め方の理解や準備及び後片付けの仕方・安全についての理解・マナーの考え方等を重視すべきだと考えられる。個人の到達目標については子ども一人ひとりの願いや思いから設定でき、これをクリアすることによって、達成感や克服感を味わうことができるであろう。なかなか達成できない子どもでも、自分なりに挑戦してきたという気持ちを大切にできるようになってほしいと願った。

技能を高めていくには、子どもたちにわかりやすい学習資料を提示していくことも大切である。ここでは、DVD等の視聴覚機器を利用することによって「何が大切なのか。」「こうすればうまくできる。」ということを視覚に訴えてわかるようにさせていきたいと考えている。しかし、子どもたちに訴えるときには指導者が跳び箱の構造的特性を把握しておかなければならない。構造的特性とは技能的統一性とも考えることができるであろう。これを踏まえた上で、子どもたちにとってよりよい学習資料を提示していきたいと考えた。

「とびばこあそび」での開脚跳びで大切にしたいことは以下のことである。①助走から踏み切りへのスムーズな動きが求められる。助走から第1踏み切り（片足で踏み切り）を経て第2踏み切り（両足をそろえて踏み切り）へと、リズムがよい連続動作をする。②踏み切りによって体を空中に投げ出し、しっかりとした着手と腕支持によって跳び越す。

③腕支持によって肩を前方に突き出し、同時に目線を前に向ける。

④上体を起こし、足から着地する。

以上のような開脚跳びのポイントになる各動作を、基本の運動として経験し、習得しておくことが重要である。それによって跳び箱運動での学習のつまずきを少なくすることができるであろう。これが、基本の運動と器械運動との系統性をもった指導になるであろう。あてをもちながら活動できるように指導していくことが必要になってくる。

2. 単元目標

(1) 単元目標

◎今持っている力でいろいろな場で活動するとともに、できる跳び方で低い跳び箱や高い跳

び箱を飛び越したり，向きの違う飛び箱を飛び越したり，できそうな飛び越し方に挑戦したりすることで，飛び箱を飛び越す気持ちよさを味わうことができる。

学習の進め方を理解し，準備や後片付けを友達と協力して行い，安全やマナーについて考えることができる。

◇いろいろな場で活動したり，高い飛び箱を飛び越したり，できそうな技を積極的に行ったりする。

◇自分のめあてをもちながら活動することができる。

◇準備や後片付けを友達と協力してすることができる。

◇安全面や集団でのルールやマナーを考えることができる。

◇腕で体を支え，着手による体重移動に気をつけながら飛び箱を飛び越えることができる。

(2) 単元のねらい

めあて1

◎できる飛び方で，低い飛び箱や向きの違う飛び箱をして楽しむ。

◇いろいろな場で活動することができる。

◇自分ができる飛び越し方がわかる。

◇安全面やルール，マナーがわかる。

◇腕で体を支えたり，安全に着地するすることができる。

めあて2

◎高い飛び箱や自分ができそうな飛び越し方に挑戦して楽しむ。

○高い飛び箱や新しい飛び越し方に挑戦して楽しむ。

○自分に適しためあてがわかる。

○場を共有する仲間とマナーやルールを守れる。

3. 単元計画

1	2	3	4	5	⑥	7
はじめ 20分	めあて1					
	めあて2					まとめ 20分

4. 単元の考察

(1) 主張点とかかわって

本単元の学習では，多くの子どもが自分から進んで学習に取り組んでおり，体を腕で支える活動を多くしたことにより，腕指示の経験が豊富になり，ほとんどの子どもが着手による体重移動をスムーズにできるようになった。

学習カードや体育作文を書くことによって，自分の学習を振り返り，学習の取り組みへの有

効利用となっていた。また、自分ができた技にシールを貼ることにより、満足感を味わい、新しい技への挑戦への励みになったと思われた。

また、本単元での主張点にも関係してくる「DVD等の視聴覚機器の利用」によって、「何が大切なのか。」「こうすればうまくできる。」ということを感じただけではなく、視覚に訴えることによってよりわかりやすくなり、学習への取り組みが深まり、技能を高めていく手立ての一つにもなり、そのことによってよりよい学習資料を提示できたと思われた。

このようなことから、ほとんどの子どもが跳び箱を跳べたという感動を味わうことができていた。以下は着目児の一人の子どもの体育作文の最初と最後の紹介である。

<最初>

最初は、手の付き方を練習して次に馬とびをしたけど、勢いをつけてもつけなくても跳べませんでした。

<最後>

今日は最後の跳び箱をしました。めあて1は6段の横で、めあて2は6段の縦をしました。両方跳べたのでうれしかったです。

(2) 互いのまなざしが響き合う姿は

本単元において大半の子どもは「とびばこあそび」の楽しさを学んでいたと思われる。また、学びあえる学習集団についても、学習カードや体育作文からも読み取ることができるように友達の良いところを見たり、参考にしたりすることによって、よりよい関わり合いをしながら学習に取り組んでいた。

しかし、全員がこのように互いのまなざしが響きあっていたかといえばそうではなかった。学習が展開されていく上で、モチベーションが持続した子どもが多かったが、反対に低下していった子どももいた。その理由は、やはり自分が跳べないことへのジレンマからであったと考えることができた。

周りの友達が跳んでいるのに自分が跳べないことに苛立ちを感じ、後半になると学習がなかなか成立しないところがあった。このような子どもが他にも存在し、学習集団としてのまなざしが響き合う姿に乏しいところがあり、これが大きな反省点となった。

5. 反省と課題

本単元では、多くの子どもが運動の楽しさを学び、跳び箱を跳べたという感動を味わうことができていた。しかし、反省点も多かったのも事実である。それを要約すると以下のものである。

- ①「とびばこあそび」の特徴である、個人を中心とした種目のため、集団という点では希薄なところがあった。
 - ②跳べないことからジレンマを感じ、モチベーションの低下する子どもがいた。
 - ③高さを追求するあまり、他の跳び方に興味を示す子どもが少なかった。
- 以上のような反省点をふまえての今後の課題は以下のことでことだと考えた。
- ①本単元のような個人が中心の種目において、学び合う学習集団を考えていく場合には、当然のことではあるが、個々の子どもをみとり、周りの関係をもみとりながらどのような手立てが一番よいのかを探っていかなければならない。
 - ②子どものモチベーションを維持していくために、器械運動では「構造的特性」を指導者が十分に把握し、その時々で説明できるように力量を高めていかなければならない。
 - ③場の設定を工夫したが、高さを変化した場が多く、高さのみへの追求となってしまった。いろいろな跳び方を追求できる場の設定を考えていかなければならない。
 - ④子どもたちがよりよい学習を進めていけるように、「学びの成立」とはどのようなものかを今後考えていかなければならないと考えられる。

来年度は、個人種目と集団種目においての「学びの成立」を考えていきたいと思っている。